5月20日 朝刊

## 今日の問題

# こわい

「これどこでとれたと？」

「五島たい」

佐世保の魚屋さんの店先では、どこでも、いまこんな問答がくりかえされている。

どの辺でとれたものの、まさか湾内ではないでしょうねときく買物カゴ片手の主婦の顔は、真剣そのもの。大丈夫、遠くの海から来たんだからと答えるねじりはち巻の下には、苦虫をかみつぶしたような表情がある。

異常放射能騒ぎの説明にやってきた科学技術庁のお役人は、ガイガー・カウンターを自分の夜光時計にあてる実演をしてみせた。ほら、この程度の放射能はどこにもあるんですよ、というわけだ。「中国の核実験の時の方が、放射能はもっとひどかったんじゃなかったんですか」とは、「安保を守る佐世保市民協議会」事務局のある自民党市議の話。

だがだれがどういおうと、魚はぱったり売れなくなった。おかげでキロ当り四百五十円のスズキが、たちまち百五十円にまで下がった。これでは商売にならぬと佐世保市東浜地区では、百二十隻の漁船のほとんどが休漁状態。浜の小さな公会堂の赤茶けたタタミに車座で、番茶一ぱい飲まずに何時間もの話合いだ。いったいだれに、どう補償してもらえばいいのかと、赤銅色の顔を見合わせるのである。

主婦たちは[illegible]として[illegible]いのか。こわいからこわいという。なんといわれようと、こわいものはこわいという。そして[illegible]が引合いに出される。「わたしたちはモルモットじゃない」

まさしくその通りに違いない。今度の異常放射能騒ぎも、もとはといえば、原潜慣れでこの恐怖感が忘れられてしまっていた、というところから起ったものではなかったか。放射能のこわさをかみしめる前に、慌ただしく核アレルギーがどうのこうの騒ぎまわる、そんな政治姿勢から生れたものではなかったのか。

漁師たちのこの恐怖感を、小手先の科学的、政治的手品でなくそうとする試みは、決して成功しないだろうし、また成功させてはならない。なぜなら、この恐怖感こそ、核時代という不幸な時代に生きる人類の、核兵器を使いとめる強い抑止となるはずのものだからである。

[illegible]漁師たちは、やがていい出すに違いない。日本人は、いや世界の人類は、モルモットではない、と。